国際分析科学会議について

藤永太一郎

去る8月25日から31日までIUPAC・ICAS'91（国際純粋応用化学連合主催・国際分析科学会議）が日本分析化学会(JSAC)の組織によって千葉幕張メッセで催された。

このICASは、何れも8月上・中旬に催されたIUPACの総会（ハンブルグ）と会議（ブタペスト）に引続いたこと、湾岸戦争やソ連のクーデタといった予想外の事件がおこった事などで、IUPAC役員や欧米の学者の参加が少なかったが、代って中国・韓国を初め東欧やアジア各国からの参加が目立って多く、結果として33ヶ国から1100人を越える参加があって、お互いに得るところの大きい盛大な会となった。筆者はIUPACの各種委員を30年以上も勤めた古顔ということもあってICASのInternational Advisory Committeeの委員長を命ぜられ、参加した。更に1972年に今回のICASの前身ともいうべきICAC(国際分析化学会議、於京都宝池国際会館）を故石橋雅義先生が組織委員長、筆者が実行委員長としてお手伝いした経験を生かすようにという事でもあったと思われる。

ICASとICACは何れも大成功であったが、19年の歳月と関東・関西といった違いもあって、双方を経験した者にとっては幾つか対照して感じた事がある。京都でのICACは、日本分析化学会にとって初めての国際会議でもあり、随分不安であったが、Belcher、Alimarin、Charlot、Martin、Walsh、West、それにMorfといった碩学の長老がこぞって参加されて盛り上がったのであったが、代って今回のICASではTownshend、Zolotof、Pungor、Simon、Hulanicki、Glasserbaur、汪、朴といった現在を代表する気鋭の顔振れが参加された。今回も丁度よい機会というので、上記の方々とJSACの名誉会員、それに、仁木、不破、合志の各教授ら組織委員の主立った方々をLe Cielというフランス料理屋にお招きして親善パーティーが催された。会は終始賑々しく、かつ大層楽しく経過して有意義な会であったと口々に賛辞を下さったが、それはお互いの多くが旧知であるという他に、食前に幾つかの重要な学術的かつ事務的討論を行なったからである。その結論は次の通りである。（1）このICASを定期的に催すことにしよう。例えば、日本は次回を10年後の日本分析化学会創立50周年である21世紀初頭に催すことを約束する。（2）しかしそれ迄にも、2～4年位の間隔で開催されることが必要であろう。それには今回スタートしたAsianalysis（次回1993年、北京）、既に伝統のあるEuroanalysisや国際分光学会などと並催することも考慮に入れて関係各国間で調整企画してほしい。（3）ところで今回初めてAnalyical Sciencesという名称で内外（日本学術会議、IUPAC）に承認を得たが、今後もこの拡大された分析化学を上記会議の通し名にしたい。

このような結論が討議の結果得られたのであるが、これら討議のうち（3）に関しては、現実と理念の関わる問題であるだけに異論も多く述べられている。分析化学の他領域への発展自体は慶ばしいことで、今後も推進すべきことながら、化学でなく科学とすることは自然科学における分析化学の立脚点を危うくするものではないか。少なくとも既に希釈化の効果が各方面に現われている。世界の化学界においても、物理化学と有機生物化学に簒奪され、ポーラログラフィー、クロマトグラフィー以後、ノーベル化学賞を受けた分析化学者がない。日本化学会学会賞の受賞も希となり、文部省の科学研究費助成全項目からも分析化学を削除しようとの意見が有力であると聞いている。分析科学は純粋化学におけるdiscipline（基礎学科）から外されるようになるのではないかという、危惧の念が一方で述べられた。

筆者は、30日夕べのICASバンケットで閉会の辞を述べることになったので、これら3つの論議の結果を全参会者に説明し、夫々の位置と立場において上記結論を機会ある毎に推進して下さるようお願いして挨

（財）海洋化学研究所　理事長

拶とした。そして私としては、IUPACのbureau（役員会）に進言し、他方わが国の学術会議と化学会に伝達することをお約束した。

8月27日はICAS第3日目であったが、学会を欠席してかねて期していたように、恩師石橋雅義先生のお墓にお詣りをした。今年は先生の十三回忌に当たるからである。

戦後間もない1951年のこと、当時東大工教授の宗宮尚行先生、京大理教授の石橋雅義先生は共同して日本分析化学会を創立されたのであったが、宗宮先生は1955年ロンドンで初めて開催された第1回ICACに出席され、1956年の第2回ICAC（リスボン）には石橋先生が出席されている。石橋先生は出発を前に、次のICACを是非日本で開催したいとの熱意に燃えて学会理事会に提案をされて承認を得ておられたので、IUPAC・ICAC（リスボン）でも趣旨説明御提案になり、全会一致の賛同を得て帰国されたのである。しかし、日本学術会議化学研究連絡委員会の賛同が得られず、次のIUPAC総会（1957年パリ）で日本代表が辞退の申し出をして実現が見送られたいきさつがある。筆者もパリ会議に出席したので、この化研連と総会の経過を知って口惜しい思いをした事は忘れられない。

当時、日本化学会は未だ国際会議開催の経験がなかったので、物理化学、有機化学など分析以外の化学者が危惧したといわれているが、また当時から分析化学が先鞭をつける事を嫌ったものだといわれている。現にその後、前者の分野で国際会議が実現し、やっと筆者がIUPAC分析部会委員に就任した（1965年）頃になって、国内的にも開催が承認されるであろうという見通しとなったのである。その経過の詳細は［分析化学、22巻8号1101～1114頁（1972）］に記録があるので茲に再記しないが、苦心惨胆ののち1972年5月京都国際会館（宝池）で大成功裡に実現した。JSAC創立20周年を記念して開催されたのであったが、先生の夢が一度破れ再実現するのに15年余りの歳月を要した事になる。

以上のような経緯もあり、今回40周年を記念して、わが国第2回目ともいうべきICASが更なる分析化学会の発展の上に立って実現したのであるから、その御報告を申し上げようというのも動機の一つであった。また、石橋先生の創立された財団法人海洋化学研究所を筆者が引続いで数年、このところようやく「海洋化学研究」なる研究所報が軌道に乗り、また表彰制度（石橋賞と呼ばれている）も充実してきたところであり、既に、米国人１名を含む５名の業績著明の海洋化学研究者が授賞され、今年第6回受賞者としては、先生の下で長年修業された共同研究者の一人である森井ふじ博士（元岡山大学教授）が選ばれた事などを報告申し上げたかったのであった。私事ではあるが、筆者はこの間に京大を定年退官し、更に奈良教育大学の学長に選ばれていたが、その大任も2期6年勤め上げて退任し、更に引続いて私立滋賀文化短期大学（八日市市）の創立に協力して、初代の学長に就任したのであったが、大学が順調にスタートし経過してゆく事を見極めて辞任させて頂いた。このような次第で墓参は10年ぶりに「積る話」を報告申し上げることにあったのである。

先生のお墓は九十九里浜も銚子に近い飯岡という町の光台寺という立派な浄土真宗のお寺の境内にある。27日は残暑酷しい日であったが快晴にめぐまれ、午前中に一つ特急が停るという飯岡の駅に降り立ったのは大方お昼過ぎであった。駅周辺は何もなく、町に近い寺までは１里半あるという遠い道程であったが、美しい田園に囲まれたお墓で先生とお話しができ、久々に心の安まる想いであった。御案内下さった和尚様とも10年ぶりの再会であったが、よいお話を承わることができた。石橋義弘氏（先生の御長男・多摩市）及び御姪御様御一家（飯岡町）が菩提を弔っておられる由であったが、筆者は今回も墓参りのみで再び旭市駅から総武線の客となり、夕刻遅く東京の宿にもどった。

石橋雅義先生の分析化学と海洋化学における御業績は有形無形かつ多くの知られざるものを含んで、かくして脈々と引継がれているのである。（1991．09．14記）